

Book title

夢をかなえるゾウ 1



kontrast-fotodesign/gettyimages



水野敬也 / 文響社 (2020/07/09)

402 ページ / 880 円 (税別)

【文庫】

総合	革新性 3.5
4.2	明瞭性 4.5
	応用性 4.5

おすすめポイント

熊倉沙希子

2007年に単行本が発売され、大ヒットとなつた本作。テレビドラマやアニメにもなつたので、タイトルに聞き覚えのある方も多いだろう。

さえないサラリーマン「僕」のものと、「自分、そんなことやから、『夢』を現実にでけへんのやで」という言葉とともに、ゾウの頭を持つインドの神様「ガネーシャ」がやってくる。ぱつたりとした大きな腹に四本の腕。関西弁で、タバコをスパスパやり、ニユートンもエジソンもビル・ゲイツも、彼が育てたのだという。いかにもうさん臭い彼が、「僕」を成功に導くためのレッスンをつける。

しかし、「僕」には腹八分にしろという課題を与えつつ、ガネーシャは限界まで食べまくる。渾身のギヤグを繰り出したかと思えば（「僕」にはスルーされるが）、「僕」の金を使いこむ。なんともお騒がせな神様と「僕」とのやりとりに笑わされ、ガネーシャの教えを楽しみながら消化することができるだろう。けれどお察しのとおり、この関係は永遠には続かない。ドラえもんとのび太くんの別れなどながらの、ガネーシャと「僕」の別れのシーンには、心搖さぶられること必至である。

この本が他の成功法則本と一線を画しているのは、その物語性だけでなく、法則を学んだその先へ言及していることだ。法則を学んでも皆が成功するわけではない。それは、法則を「実行」する人があまりに少ないからだ。だからこそ、必ず「実行」すべし、という内容が、本書でははつきりと主張されている。

楽しみながら読めて、効果が高い。読まずにいるにはあまりにもつたない一冊だ。

※本要約は、過去に作成した要約を最新版に合わせて一部再編集したものです。

本書の要点

■ お金は、人を喜ばせ、人を幸せにしたぶん、入つてくる。お金を得たいならば、自分の欲ではなく、人を喜ばせたいという気持ちを大きくしていくことが大切だ。

■ 人間は、やりたいことや楽しいことをしかやれない動物だ。やりたいことをやり、頑張ることや成長することは楽しいと思えるよう、自分にインプットすることが、自然と成果につながる。

■ 成功法則を学ぶだけでは、人は変わらない。知識を吸収することによってではなく、行動することによってのみ、人は変わることができる。

神様登場

契約

「すげー普通の会社員」で、変わりたいと思いつながらもいつも何も変えられず、自信を失い続いている「僕」。彼のもとへ、うさん臭いゾウの頭の神様、ガネーシャが現れた。ここでこそ関西弁で、大きな腹をさすり、宙に浮いている。歴史上の偉人を育ててきたとのたまい、「僕」が望み、契約するならば、「僕」を成功へ導いてくれるという。

契約とは、次のようなことだ。ガネーシャに教えを乞うのなら、ガネーシャの出す課題を必ず実行すること。そうしなければ、自分の将来に対する「希望」をごつそりとられてしまい、それは別の人へ渡されてしまう。

自分に嫌気がさしている「僕」は、この契約に賭けてみることにした。

読者は、「僕」とともに、ガネーシャから出される課題をこなしていくことになる。課題は毎日ひとつ出され、どれも難しいものではなく、一日でできるものになっている。けれど、どれも偉大な人たちが実践してきたことであり、人生を変えるほどの効果をもたらすものだ。

大切なことは、「とにかくきちんと実行すること」。しないと、読者のあなたの「希望」

も、ガネーシャとの契約どおりにとられてしまふかもしれない。

必読ポイント

ガネーシャからの課題

靴を磨く

かくして、「僕」のチャレンジが始まった。しかし、その前に、神様に教えを乞うのである。

楊枝をくわえたガネーシャは、「僕」を玄関へ連れていく、「靴、みがけや」と言う。ふだん「僕」が会社へ行くときに履く黒い革靴は、泥や砂で汚れ、甲のあたりはデコボコになっていた。こんなことが「教え」なのだと憤慨する「僕」に、ガネーシャは面倒くさそうに説明しだした。

メジャーリーグで活躍するイチロー選手は、小さなころから、他の選手が帰つてもグラブをみがいていた。「神聖な商売道具を粗末に扱うことは考えられない」と言つて。イチローの今の地位は、そういう仕事に対する姿勢があつてこそなのだ。

「僕」にとつての商売道具は、働く一日をずっと支えてくれている靴なのだ。そういう、自分を支えてくれるもの大切にしてこそ、成功へ近づくのだという。

「僕」は、そんなことをして意味があるのかとわめく。しかし、「僕」のその態度こそ、「自分の考え方」にしがみついていることであり、「成功しないための一番重要な要素」なのだ、と指摘され、不承不承靴をみがくことにする。

「僕」は、靴みがきは案外気持ちがよいことに気づく。



nicooud79/gettyimages

れば……とガネーシャは供物を要求する。不安に思いながらも、親戚から送られてきたあんみつを渡すと、ガネーシャは息もつかずに食べまくり、「自分、いきなりホームランやで」と大興奮。

コンビニでお釣りを募金する

靴みがきはいいが、しかし、こんなことで本当に変われるのかという気持ちが消せない「僕」。もっと「秘訣つぽいこと」を教えるとガネーシャに迫る。すると、そういうのが知りたいなら、自分で買ったビジネス書を読め、それに、それは楽して成功したいという甘えの裏返しだ、と言われてしまう。

今日は『募金でいこか』というのが、新たなガネーシャの教えである。

スタンダード・オイル社を作った石油王、ジョン・ロックフェラーが、ずっと欠かさず行っていた習慣が、寄付だ。

大してお金をもうけていなかつた若いころから、ロックフェラーは収入の一割を寄付し続けていた。

この習慣は、優秀な人材を多数輩出しているユダヤ人律法書にも記されている。「汝の収入の10パーセントを分け与えよ」というのがその言葉だ。

「寄付の習慣は、世界的にもスタンダードつちゅう話やな。スタンダード・オイル社だけに」と一発かますガネーシャを無視し、なぜ寄付が成功に結びつくのかわからない、と素朴な疑問をぶつける「僕」。

ガネーシャは答える。お金というものは、人を喜ばせたぶんだけもらえる。だから、金持ちに「なる」人は、人を喜ばせたいと思う人なのだ。金持ちに「なりたい」人は自分を

喜ばせたくて欲ばかりが出てしまう。だから、金持ちになりたければ、人を喜ばせたいと思う気持ちを、素直に大きくしていくことが大事だという。

ひとまず、「僕」は、顔なじみのいないコンビニで、100円を募金箱に入れた。今度から、自分の100円が人を幸せにしている、素晴らしいことだ、と意識して募金すること、とガネーシャはアドバイスをした。

ガネーシャが来てしばらく経つたころ。「今までワシが出した課題、覚えると? ちよつと思い出してみ」と言われ、「僕」は、自分にしては頑張れていると確認する。

ガネーシャは、こうして自分が頑張っているか確認するのはとても大事なのだと語る。人間は楽しいことややりたいことしかできない。だからこそ、「成長したり頑張ることは楽しい」と自分に教えていかねばならないのだという。

マンガ家の手塚治虫は、死の間際、病院のベッドの上でも、漫画を描いていた。しかしこれは、努力してやつていたことではなくて、やりたいからやつていたのではないだろうか、とガネーシャは言う。やりたいことをやる、というのは、難しいことではない。

努力そのものを目的にしてしまっては、その努力は続かない。やりたいことをやる状態で、自分を動かすのだ。

だからこそ、毎日、一日の終わりには、自分が頑張れたことを思い出して、自分はよくやつた、とホメてやる。頑張れなかつたことを探しで自分を責めるのなく、逆にホメることで、「頑張つたり成長したりすることは楽しい」と自分にインプットするのだ。

その日頑張った自分をホメる



fstop123/gettyimages

身近で一番大事な人を喜ばせる

ある日のこと。「僕」は、ガネーシャにせ

がまれ、ガネーシャとその友達の积迦（！）

）を富士急ハイランドに連れていく。激しいアトラクションに大はしゃぎし、お化け屋敷でお化けを逆に驚かせて喜ぶ彼らに連れまわされ、「僕」は疲弊した。

帰りがけに、今日の課題を問うと、ガネーシャは、もう終わつた、と言う。課題は「身近で一番大事な人を喜ばせること」だった。人間は、どうでもいい人には気を遣うのに、一番お世話になつている人や一番自分を好きでいてくれる人をぞんざいに扱つてしまふ。たとえば、親や親友や先輩。また、自分をひいきにしてくれるお客さんよりも、うるさいクレーマーを優先してしまうこともある。会社の上司は、できる社員はほうつておいて、できない社員にばかりかまつてしまつたりする。

コカ・コーラの社長を16年間務めたロベルト・ゴイズエタは、毎日、コカ・コーラの大株主ウォーレン・バフェットに電話をした。会社にとつて一番大事な人を、一番大事にしたわけだ。ウォーレン・バフェットは、コカ・コーラの業績がどんなに下がつても支援をやめなかつたという。

「僕」は、しかし、ガネーシャの言葉を思い出し、僕にとつて一番大事な人はガネーシヤつてことか？ それでいいのか？ と深い疑問を抱きつつ家路についた。

人間が変わるのは、立って、何かした時だけ

最後の課題を必ず実行に移すこと

ガネーシャの課題を通して、「僕」は、だんだん変わってきていた。仕事のことやお金のことを少しずつつかめてきた。お金を得るために、自分が楽しいと思うことで人を喜ばせることが大切なのだということもわかつ



Drazen Zigic/gettyimages

てきた。

けれど、ガネーシャは、ためらいながら、「自分、このままやと変われへん、思うねん」と切り出す。今の「僕」は未来に対して期待している。けれど、期待しているかぎりだと、現実を変えることはできないというのだ。期待して、けれどそんなに簡単に物事がうまくいかないという現実にぶちあたるとき、人は夢を失くす。そう告げるガネーシャの体は、もうあまり「僕」のそばにはいられないことを示すかのように、薄く消えかかっていた。

それでも、と教えを乞う「僕」に、ガネーシャは伝える。自分が変わるのは、行動して、経験した時だけだ。座つて、ガネーシャの言うことを聞いていても、現実は何も変わらない。知識を吸収しただけでは人間は変われない。人間が変わるのは、実際に何かした時だけだ。だからこそ、これから出す課題は、今後の人生において自分の一部となるまで実行しつづけなければいけない。

ガネーシャは、自分の教えなど過去の成功法則書に書いてあると言う。どうすれば人が成功できるか、という法則は既に明らかになつてているのだ。それでも世の中に成功法則書があふれ、ほとんどの人が成功しないのは、人がそれらを読んでも何もしないからだ。「教え」そのものには、人を変えるだけの力はない。人が変わるには、その人自身の行動が必要なのだ。

やらずに後悔していくことを今日から始める

早起きした「僕」はトイレ掃除をする。トイレ掃除をするのは久しぶりだ、と感じながら。やはり、ガネーシャの言うとおり、自然な状態で、教えを習慣のように実行することは難しいものだと実感していた。

そんな「僕」に、ガネーシャは問う。「自分の『やりたいこと』って何や?」。

しかし「僕」にはわからない。ガネーシャは、「僕」が、やりたいことを見つけるために、一番やつてはいけない方法をとっているという。それは、「考える」ということだ。本当にやりたいことに出会ったときには、「ああ、これこれ」と全身でわかる。やりたいことを見つけるための方法は一つだけ、「体感」することだ。やりたいことがわからないという人のほとんどは、何もやつていない人なのだ。それでも「僕」は、何から手をつけたらいいのかわからない、と訴える。それならば、「やらずに後悔していること」を今日からやるのだ、という答えが返ってきた。

ほとんどの人間は、後悔したまま死んでいく。でも、「僕」はそとはなりたくない、と思つた。



maroke/gettyimages

は、建築の仕事に就きたかったことだと気がついた。収入や企業のネームバリューで今仕事を選んだが、本当は、そのことを後悔していた。

一読のすすめ

ここでは、ガネーシャの教えるほんの一部を紹介したにすぎない。ぜひ、すべての教えを知るべく、通読してみてほしい。

また、本書の正しい使い方は、内容を楽しんで身につけ、それを実行することだ。お手元に置いて、繰り返し読むのが効果的だと思われる。

かめてほしい。

水野敬也（みずのけいや）

作家。愛知県生まれ。著書に『夢をかなえるゾウ』シリーズほか、『雨の日も、晴れ男』『顔二モマケズ』『運命の恋をかなえるスタンダール』『四つ話のクローバー』、共著に『人生はニヤンとかなる！』『最近、地球が暑くてクマつてます。』『サラリーマン大喜利』『ウケる技術』など。また、画・鉄拳の絵本に『それでも僕は夢を見る』『あなたの物語』『もしも悩みがなかつたら』、恋愛体育教師・水野愛也として『LOVE理論』『スバルタ婚活塾』、映像作品ではDVD『温厚な上司の怒らせ方』の企画・脚本、映画『イン・ザ・ヒロー』の脚本を手掛けるなど活動は多岐にわたります。